

宮城県北上川河口域のヨシ原

1. 地域の概況

東北最大の河川・北上川の河口域には、日本有数の広大なヨシ群落は河口・追波湾まで十数キロメートルにわたり広がっている。北上川は水害防止のため、1911年より大規模な開削工事がおこなわれた。それに伴い、北上川河口域の土地が国に買収され、二つの集落が移転を余儀なくされた。買収地（その多くは水田）にその後ヨシが自生するようになると、移転した二集落を中心に周辺住民が、「契約講」として利用権の承認を国から受け、好を集落で刈り取って活用し始めた。その背景には、以前よりこの地域のヨシ原を地域住民がさまざまに利用してきたことがある。



図 北上川河口域（宮城県石巻市）

2. ヨシ利用の変遷

ヨシ原を共有財産として占有してきたのは、村落内の互助組織のひとつである「契約講」である。この組織は、ヨシ刈作業の単位をなしていた。ヨシは、茅葺屋根、海苔簾、土壁の小舞（下地材）の原料として利用されてきたが、高度成長期以降これらの需要が低下し、現在では、文化財である寺社の屋根材や簾の材料として細々と利用されている。また、かつてのように地域住民ではなく、契約講より作業委託を受けたヨシ茅採取・加工・販売業者がヨシの伐採・採取を行うことが多くなった。



北上川ヨシ原（石巻市北上町）
出典：<http://www.pref.miyagi.jp>

3. 住民とヨシ原の新たな関係

このように住民とヨシの距離が広がってきたが、水質浄化や絶滅危惧（危急種）の昆虫や鳥の生息場としてのヨシ原のはたらきへの注目が高まりつつある。そうした中、2002年に「ヨシ原を守る会」が結成され、ふだん利用されていない場所に火入れするなど、住民とヨシ原の新たな関係が芽生え始めている。

出典：塚本善弘，2007.「コモンズ」としてのヨシ原生態系活用・保全の論理・展開・課題 - 北上川河口域をフィールドとして.アルデス リベラレス(岩手大学人文社会科学部紀要), 81: 170-202 (<http://hdl.handle.net/10140/1885>).